

1 2 : 造成法が異なるガレガ草地植生の比較

畜産科学科食料生産科学講座 堀川 洋

メールアドレス horikawa@obihiro.ac.jp

研究の概要

【目的】

輸入飼料価格の高騰により、タンパク質やミネラルを多く含むマメ科牧草を自給生産して飼養経費を削減することが必用である。そのため、従来より永続性が高く多収なマメ科牧草の出現が求められている。

ガレガは東欧のエストニアから導入され、2002年から種子が市販されている新規マメ科牧草である。ガレガは、道東よりも厳寒な地を起源として地下茎で繁殖することから、従来から広く栽培されてきたクローバ類やアルファルファにはない高い越冬性や永続性が期待される。

我々は畜産フィールド科学センターにおいて、7年前より別科の特別研究として、ガレガ草地の造成法の比較や草地植生の経年調査を行ってきた。また十勝管内大樹町にも造成法が異なるガレガ草地がある。本研究では、これらの草地を比較検討することによって、永続性の高いガレガ草地を造成するための必要要件を明らかにすることを目的とした。また、長期間に渡ってガレガを調査してきた一応のまとめとして、酪農家や指導機関に聞き取り調査を行い、ガレガ栽培を普及する上での問題点や今後の課題について情報を得た。

【方法】

畜大実験圃場には、造成後5年目になる除草剤処理同日播種法によって造成したチモシー混播区とガレガ単播区、および6年目になる除草剤処理同日播種法と慣行播種法による2つのチモシー混播区がある。また、大樹町には、除草剤処理同日播種法による6年目のチモシー混播草地と慣行播種法による3年目のチモシー混播草地がある。これらの各種草地でこれまで調査してきた植生（冠部被度）と収量の結果を用いて、永続性の良否について検討した。

聞き取り調査は、大樹町の酪農家40戸、専門普及指導員、および畜大職員を対象に、ガレガについての認知度、今後のガレガの利用予定などについて、またガレガの栽培経験者からは栽培・利用についてコメントを得た。

【結果】

ガレガの生育は、造成初年目にはチモシーに比べて大きく劣っていたが、ガレガは地下茎で繁殖する生育特性があることによって、年次を経過するに伴い次第に生育が旺盛になっていく特徴が認められた。また大樹町と畜大のいずれにおいても、ガレガの植生割合が高い経年草地は除草剤処理同日播種法によって造成されたものであった。5、6年目のガレガの冠部被度は、慣行播種法の草地で約10%であるのに対して、除草剤処理同日播種法の草地では45-60%であり、明らかな差があった。これらの結果から、良いガレガ草地を造成するためには、除草剤処理同日播種法を採用する必要があることが認められた。

聞き取り調査の結果から、ガレガの特性に関する認知度が高いものの栽培に積極的になれない理由として、成功事例が少ないことが多く挙げられた。今後の課題として、播種時期の限界、ガレガと刈取り適期が一致するチモシー品種の組み合わせ、刈取り危険帯の把握など、ガレガ草地の安定生産に向けた基礎的な検討が更に必要である。